

石田波郷の句碑を巡る④ ～俳句の道～

校長 玉井 啓二

松山市内には、本校の卒業生で昭和を代表する俳人である石田波郷の句碑が数基設置されています。本年度は、それらを巡り、句碑に記されている波郷の俳句を鑑賞しています。今回はその第4回目で、愛媛県県民文化会館の東側の「俳句の道」に設置されている波郷の句碑を紹介します。

まず初めに、「俳句の道」に設置されている句碑を紹介します。次に示すように、道後2丁目と道後喜多町にそれぞれ5基ずつ、計10基の句碑が設置されています。※ⁱ（下の写真は、垣生出身の村上霽月と余土出身の森盲天外の句碑です。）

道後2丁目

- | | |
|--------------------------------|-------|
| ① 永き日やあくびうつして分れ行く | 夏目漱石 |
| ② 春百里疲れて浸る温泉槽哉 | 村上霽月 |
| ③ 馬しかる新酒の酔や頬冠
糲ほすやにわとり遊ぶ門の内 | 正岡子規 |
| ④ 温泉めぐりして戻りし部屋に桃の活けてある | 河東碧梧桐 |
| ⑤ いろいろの歴史道後の湯はつきず | 前田伍健 |

道後喜多町

- | | |
|---------------------|-------|
| ⑥ 湯上りを暫く冬の扇かな | 内藤鳴雪 |
| ⑦ 伊豫と申す国あたゝかに温泉わく | 森盲天外 |
| ⑧ 湯の町の見えて石手へ遍路道 | 柳原極堂 |
| ⑨ ほしいま、湯気立たしめてひとり居む | 石田波郷 |
| ⑩ ずんぶり湯の中の顔と顔笑ふ | 種田山頭火 |



② 村上霽月の句碑



⑦ 森盲天外の句碑

下の写真が、道後喜多町に設置されている波郷の句碑です。ここに記されているのが、次の俳句です。

ほしいま、湯気立たしめてひとり居む

石田波郷

この句碑が設置されている「俳句の道」は、近くに道後温泉がある関係からか、上に示しているように温泉にまつわる俳句を記した句碑が多く設置されているようです。そのため、この句も一読すると、一人旅で温泉宿の湯に浸かっているような情景を想像するかもしれません。しかし、この句の季語「湯気立つ」は冬の季語で、冬に空気が乾燥しているために、ストーブなどの火の上にやかんや鉄瓶、金たらいなどを乗せて湯気を立て、室内の乾燥を和らげる様子を指したものです。このような季語の意味を踏まえると、この句の中の湯気は温泉ではなく、加湿のために室内で立てた湯気ということになります。



⑨ 石田波郷の句碑

副碑には、この句が昭和17年（1942年）に詠まれたことが記されています。この年は、波郷が召集を受ける前年であり、戦時色が濃くなっていた頃でしょう。ですから、私は当初、この句には、もうもうと立ち上る湯気のように沸き起こる孤独感や将来に対する不安感のような波郷の心情が表れていると解釈していました。そして、この句の「ひとり」は波郷自身であり、湯気が立ち上る部屋で波郷が一人で過ごしている様子を想像していたのです。

ところが後に、最下段の【引用】に示したサイトで、「帰省中の妹を詠んだものと言われている。」※ⁱⁱという短い解説を見つけました。そうすると、この句の「ひとり」は妹ということになりそうです。そして、「妹は自分のため、家族のために十分な湯気を立てさせてくれている。そのため、火から離れずに、ずっと一人である。」というような解釈になるでしょう。部屋に立ち込める湯気の向こうに一人で過ごす妹の姿を見た瞬間、献身的な妹の優しさを感じ取った波郷が抱いた、妹への感謝や申し訳なさが表れていると思われます。

【引用】※ⁱ 四国・愛媛 俳句の里 松山

※ⁱⁱ 俳句の聖地「愛媛・松山」へ吟行をいざなうサイト | 五・七・五のこころ旅 吟行ナビえひめ